

「クリスマスケーキ」

一般 青柳 美津子（仮名）

もうすぐクリスマスがやってくる。クリスマスと聞いて想像するものは、人それぞれだけど、とりあえず私にとってクリスマスケーキは欠かせない。クリスマスケーキは、普段食べるケーキよりも見た目も味も、もちろん値段だって豪華で、誕生日ケーキを食べることがワクワクだとしたら、クリスマスケーキを食べることはドキドキなのだ。私にとってクリスマスケーキは、小さい頃からの特別なものの。

小学校の低学年ぐらいのクリスマスだったと思う。私は母と一緒にデパートへクリスマスケーキを買いに行った。いわゆるデパート地下、クリスマスとあって、お店もお客さんもみんな幸せそうな雰囲気が今でも鮮明に残っている。そんな中、私は母とケーキ売り場に向かった。大きくて、かわいくて、それでいて綺麗なケーキがガラスケースに上品に並べられている光景は、子供心にとても響いたのだ。どのケーキもとてもおいしそうで、とにかく見とれてしまって、なかなか選ぶ事ができなかった。

やっこの思いでどのケーキにするか決めた時、私はある事実に気づいた。人がごったがえし次々とお客さんがケーキを買っていくなか、まだ背が低い私は列の一番前にいるとはいえず、お店のお姉さんからは私は見えないということに気づいたのだ。母は私にお金を持たせ、後ろの方で待っている。いったん母の元へ戻ろうかと思ったけど、今日はクリスマス。何か特別な事ができそうだという気になり、自分一人でケーキを買って母の元へ戻ってみせようと小さい私は意気込んだ。

覚悟を決めて、まずはお姉さんに目で訴えてみる。「お願い！気付いて二」と念じてみても、ただでさえクリスマスで混雑していて、他のお客の注文も必死で受けている状態。まるで戦場のように慌しい店内。あの状態で、見えにくい所にいる私に気付くという方が無理な注文だった。しばらく茫然と立ち尽くして、だんだんくじけそうになってきた。でも、目の前にあるキラキラ輝くケーキを見つめていたら、また勇気が湧いてきて、今度は声を出してみようと決意した。と言っても、なんと声をかけていいかわからず、「あのー！ あのー！」としか言いようがなかった。それじゃあ気付いてもらえるわけもなく、もう半ベソかいてる状態

だった。せつかくのクリスマスなのに、楽しいクリスマスなのに、何でこんな悲しい思いをしなきゃいけないのかと、今度はちよつと腹が立ってきた。

その時、救いの声が私に聞こえてきたのだった。お店のお姉さんが私に気付いて声をかけてきてくれたのだった。あの時の嬉しさといったら、クリスマスのせいか、お姉さんが天使に見えたほどだった。優しくどのケーキがいいのかと訊かれた私は、大喜びで「これ下さい！」とどうにか注文することができた。お会計を済ましてしばらく待っていたら、お姉さんがかわいらしい箱に入れたケーキを持ってきてくれた。しかし、その箱をお姉さんが上から渡してくれた瞬間、やってしまった。ちゃんと受け取る事ができず、私は箱を落っこしてしまったのだ。ケーキの入った箱はそのまま下へ落ちて、グシャっとなった。中は見なかったけど、中のケーキも文字通りグシャっとなっただろう。私は悲しむというより、びっくりしてしまい、その場で固まった。ふと我に返り、どうしようと不安でいっぱいになり始めて、再び泣きそうになった。

だけど、やっぱり天使だった。お店のお姉さんは天使だったのだ。すぐに私のところまで出てきてくれ、大丈夫だよと優しく声をかけてくれた。そして、新しいケーキを箱につめて渡してくれたのだ。私はすごく嬉しくて、でも申し訳なくって、そして更に照れくさくって、でもお礼を言わなくちゃと思って、「ありがとう」と言ったら、また優しく笑いかけてくれて、本当に嬉しかった。あの時、意地悪な店員だったら、きつとほおっておかれただろうと思う。そしたら、きつと嫌なクリスマスになっていただろうし、クリスマスケーキなんて嫌いになったかもしれない。そう思うと、あの時のお姉さんには心から感謝したいと思う。

今、私はケーキ屋さんでアルバイトをしている。まだ始めたばかりだけど、もうすぐクリスマス。天使とまではいかないだろうけど今度は私が、楽しくって素敵なクリスマスをケーキと一緒に贈れるように、そのお手伝いが出来たらいいなと思う。